

特集 氷の洞窟



青の中へ

～ラ・ヴェンタと行くパタゴニア氷河洞窟遠征記～

松澤 亮 (MATSUZAWA, Ryo 東京スペレオクラブ 埼玉県在住)

はじめに

ナショナルジオグラフィック 1996年2月号で氷河洞窟の青い世界に出会って以来、氷河洞窟に関心を持ち続けてきた。2002年にはアイスランド遠征(ケイビングジャーナル 20号参照)に参加し、2005年はロシアカフカスの山岳氷河(同24号)、2006年にはアメリカ合衆国ワシントン州(同31号)を訪れた。そして今回(2010年)、イタリアのラ・ヴェンタ(La Venta)協会が主催する南米パタゴニアでの氷河洞窟遠征に参加した。14年前に写真で見たその場所で、そのメンバー達と共に活動する事になったわけだ。

きっかけは2009年7月、テキサスでのUIS国際洞窟学会議(同38号)でジョバンニ・バディーノ教授と再会し、メキシコのナイカ結晶洞窟の話聞いた時。今回の会議では氷河洞窟の発表が無かったので「最近ではもう氷河洞窟はやっていないのか？」と質問したところ、「来年パタゴニアへ行くけれど一緒に来るか？」と誘われ、今回の参加となった。

思えば以前会った時に「メキシコに面白い洞窟があるんだ」と言われたのだが、それがナイカ洞窟の事だったらしい。その時の話では鉱山の人工洞口の中に結晶が有る、というだけだったのであまり興味が湧かずに聞き流していたのだが、後にメールで送られて来た巨大な結晶の写真を見て驚いた。我ながら、行っておけば良かったのに惜しいことをしたものである。

現地入りまで

事前には日程の打合せ以外はほとんどしなかったが、ラ・ヴェンタは何度も現地へ行っているチームなので気分的には楽である。久しぶりで氷河洞窟の装備を取り出して雪山へ行き、足慣らしをした。

日本からは2回の乗換えで約36時間後にカラファテ(El Carafate)に着く。時差は12時間+6ヶ月。日本からブエノスアイレスまではアメリカン航空を利用したため、荷物の超過料金はアルゼンチン国内線だけで済んだ。

2月12日夕方、空港へ着くと、ジョバンニとトーノがタクシーで迎えに来ていた。彼らも同日午前中に到着していたのだ。そして連れて行かれたのがカラファテの町にある警察軍(Gendarmeria)の駐屯地。こ

この兵舎の倉庫に寝袋を敷いて我々のカラファテでの基地とし、時には軍用トラックで港への送迎等の便宜をはかって貰った。

カラファテはパタゴニア観光の拠点となる町で、ホテルやオートキャンプ場、飲食店、インターネットカフェ、ランドリーサービス、ツアー会社等が立ち並ぶ他、国立公園局の事務所もある。山用品を扱う店も多いが、トレッキングツアー等に参加する観光客が対象なため、衣料品や靴、サングラス等の小物ばかりで、本格的な装備の入手は難しい。EPI適合の韓国製ガス缶、ストック等ががらうじて購入できる程度である。ここは観光の拠点であって登山基地ではないのである。

パタゴニアの名物料理、アサドは羊の開きを焚火で炙ったものである。そしてアルゼンチンは牛肉が主食だと言ってもいいほどの肉食文化で、ボリュームが多いため胃腸にこたえる。カラファテには他にもピザ屋やカフェも多く、鮭屋が一軒と中国人が経営するバイキング形式の店もあって、単調な食生活に飽きた時には助かる。

到着翌日、アルゼンチン人メンバーのエステバンの両親がガス缶など事前に手配しておいた物資をピックアップトラックに積んでやってきた。スペイン語とイ



◀カラファテの基地にて。軍用トラックやジープの他、バギーやスノーモービルもある。



▶軍用トラックの脇でカメラクレーンの練習。